

# 平成 22 年度「自立と体験 1」を振り返って

鈴木 浩子\*

## 1. はじめに

平成 22 年 4 月 9 日より開講した全学初年次教育「自立と体験 1」は、全 15 回を無事に終了した。本稿では、出席率などの実施結果とともに、学生の授業アンケート、担当教員のアンケートなどから、22 年度の実施状況を振り返ってみたい。

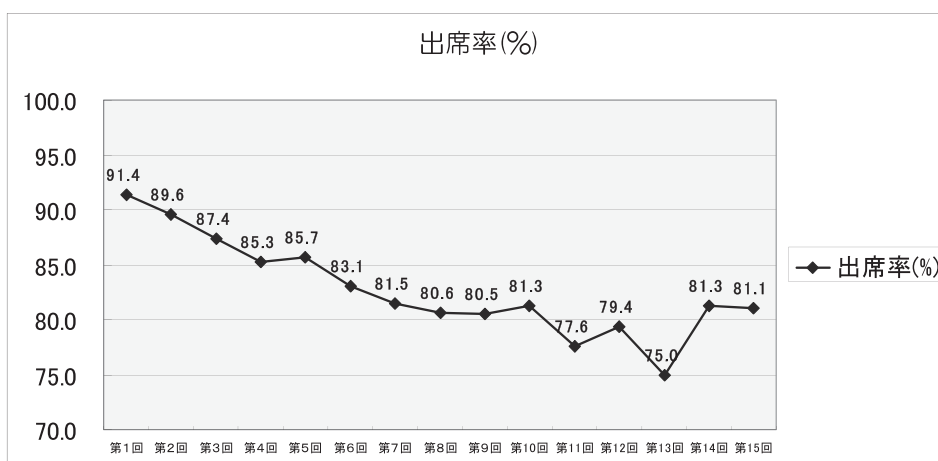
## 2. 授業実施結果

### ①出席率

全体を通しての出席率の平均は、82.7%であった。出席率の推移を見ると、最も高かったのは、第 1 回授業の 91.4%で、その後少しずつ低下したが、第 10 回までは、80%以上を維持していた。最も低かったのは第 13 回の 75.0%であった。この回が最も低かった理由については推測しかできないが、後述する「ためになった」と思う回の授業を選ぶアンケートで、直前の第 12 回が 5 番目に良い数値だったことをみれば、授業の内容に関わることはないように考えられる。これも推測になるが、授業の出席回数が単位修得条件に達し（学生は 11 回以上の出席が必要だと認識していた）、それでも授業に出続けようという魅力までは、この授業が提供できなかったという可能性も考えられる。

自立と体験 1 は金曜日の 1 限 2 限と土曜日の 1 限 2 限に授業が行われた。当初、土曜日の登校に慣れていない学生達の土曜日の出席率が下がるのではないかと懸念されたが、結果的に金曜日 1 限が 82.8%、2 限が 83.7%、土曜日 1 限が 82.3%、2 限が 80.0%となり、金曜日と土曜日の出席率の間に意味のある差は見られなかった。授業の曜日は出席率に影響しなかったと考えることが出来る。

私自身、金曜日・土曜日にそれぞれ 2 クラスずつ担当したが、学生の反応や出席率の違いは、曜日の差というよりクラスの雰囲気の違いであったように感じている。学生たちが、そのクラスでの授業に興味をもって取り組める雰囲気が出来ると出席率が好転する。またこの雰囲気の形成は、教員の取り組みの影響のみではなく、同じように授業を進めても非常に雰囲気の良いクラスと



\* 人文学部特任准教授 明星教育センター

盛り上がり欠けるクラスがあった。様々な要因が影響するものだと考えられる。

## ②単位修得者数

平成22年度前期に単位修得予定の学生は入学者の93.9%、1,965人であった。

昨年までは旧カリキュラムの「自立と体験」「自立と体験A」が学部学科ごとに行われていたが、2009年度入学者のうち、単位修得者は87.2%であった。単位を取るだけで全てではないが、昨年と比較すれば、6.7%の留年予備軍を減少させることができたと言える。

なお、「自立と体験1」は初年次教育という授業内容の特徴から、なるべく1年生のうちに単位修得させることに意味があると考え、夏季休暇期間中に補習を実施した。これは担当教員の指名を受け、3日間9コマの補習授業を無遅刻無欠席で修了した学生に単位修得を認めるというものであった。この補習による単位修得者は84人で、全体の4.0%であった。

補習に出席した学生にアンケートを取り、前期の「自立と体験1」の欠席理由を聞いてみた。最も多い回答は「朝起きられなかった」というもので、85名中複数回答で77名がこの選択肢を選んでいる。その他、「病気や怪我で出席できなかった」14人、「グループに馴染めなかった」11人、「参加型学習が苦手だった」8人となった。「朝起きられない」という物理的な理由が、欠席の大きな理由になっていることが分かる。1年生のうちに生活習慣を付けることが、留年等を防ぐ要素になるかもしれない。

なお注目すべきこととして、このアンケートで「グループになじめなかった」「参加型学習が苦手」と答えている学生も、他の設問に対して「補習はとても良かった」「やってみたら良かった」と答えている確率が高く、学生はこの授業形態に対しては肯定的だということが分かる。何らかの原因でクラスやグループになじめなかったことが欠席につながった可能性も考えられる。

## 3. 学生による授業アンケート

次に、学生に実施したアンケート結果から見ていく。

学生アンケートは、第1回と第15回の授業内で実施した。9つの選択設問は同じ内容とし、15回の授業実施による学生の変化を見た。また第15回の授業で実施したアンケートでは、授業の特徴をあげて学生の評価を尋ねる設問を4つ設けた。

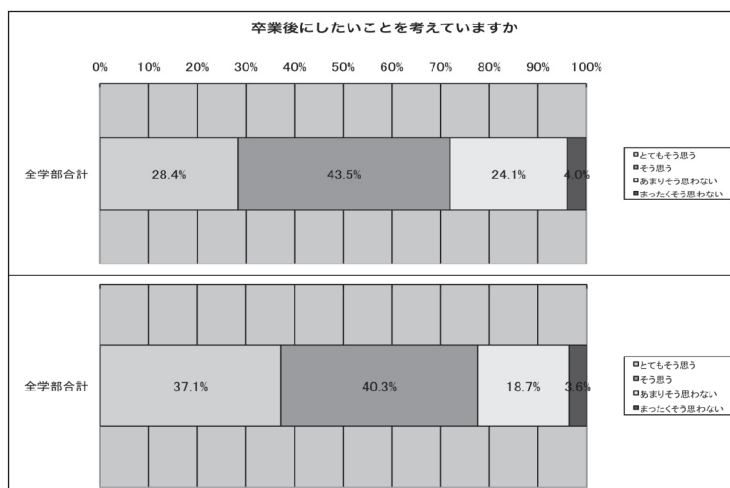
回収数は、第1回1,946人、第15回1,715人となり、第15回で231人減っているが、この人数は欠席者の数とほぼ一致している。

### ①「自立と体験1」による学生の変化

第1回目と第15回目で共通して実施した9つの設問のうち、8つの設問で「とてもそう思う」「そう思う」という学生の数値が上昇した。意図する方向に数字が変化したと出ることが出来るだろう。

#### ■卒業後にしたいことを考えていますか

「とてもそう思う」「そう思う」の合計は

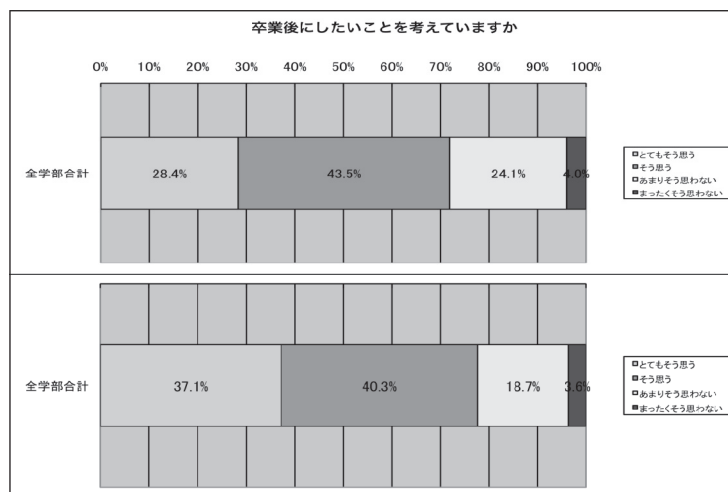


71.2%が 77.4%に上昇した。

特に「とてもそう思う」と答えた学生は第 1 回が 28.4%だったのに対して、第 15 回では 37.1%に増加した。卒業後にしたいことをあいまいながら漠然と考えていた学生にとっては、具体的に深く考える機会になったのではと推測できる。

■学生時代にすべきことを考えていますか

「とてもそう思う」「そう思う」の合計は 79.1%から 83.9%に上昇した。この項目も、「とてもそう思う」と答えた学生の増加が大きく、17.9%が 28.6%に増加している。アンケートの自由記述から、関連する記述を拾ってみると「自分について改めて考えることが出来た」「自分の将来の目標が考えられた」「これから何をすべきかが考えられた」といった意見が多く見られた。



■自分の意見を筋道立てて話すことができますか

33.3%から 62.0%と、「とてもそう思う」「そう思う」の合計が大幅に変化した。学生の主な意見をみると「意見を述べることの大切さ」や「コミュニケーションを取ることの楽しさ」などについて、さまざまな気づきがあったようだ。

■明星大学の歴史や教育の特色を知っていますか

「とてもそう思う」「そう思う」の合計が、23.7%から 46.9%に変化した。「大学について学んで安心した」というコメントは、大学への適応がスムーズに出来たことを表している。

■大学の図書館の利用方法を知っていますか

同じく「とてもそう思う」「そう思う」の合計が、33.4%から 90.2%へと大きく変化した。「図書館の回はもっと早くやってほしかった」という意見から、この授業が図書館を利用するきっかけになっていることがわかる。

■他者に敬意を払い、規律を守って学習活動ができますか

唯一「とてもそう思う」「そう思う」の数値が下がっており、89.8%から 80.8%と変化した。授業を通して友人が増えたことにより、「自立と体験 1」の授業はもちろん他の授業でも私語が増えたという教員からの意見がある。大学になじむことによって、ルールや規律を守ることが難しくなってしまうことに学生自身も気付いているということかもしれない。または学生が客観的に自分自身を見ることが出来るようになったためかもしれない。

## ②学生による「自立と体験1」の授業評価

学生による授業の評価は4項目実施したが、全般に非常に高い数値が出た。

- 「他学部他学科の学生との交流」は役立ったか  
「とてもそう思う」「そう思う」の合計が 92.6%
- 「少人数クラス」は役立ったか  
「とてもそう思う」「そう思う」の合計が 89.9%
- 「グループでの学習活動」は役立ったか  
「とてもそう思う」「そう思う」の合計が 89.2%
- 「ポートフォリオ」は役に立ったか  
「とてもそう思う」「そう思う」の合計が 80.0%

ポートフォリオに対する評価は、他の項目に比べれば、やや低かった。学生の授業評価の基準が、ポートフォリオではなく、他の要素、特に「他学部・他学科の学生との交流」といった授業形態だったことが考えられる。導入前に反対意見が多かった「学部学科横断」「グループ学習」ともに学生の評価は高かった。

関連する自由記述を見ていくと、「他学部他学科の学生との交流」については、友達ができたということに加えて、新しい考えを知ることができたという意見があった。「グループ学習」については、ともに成長する実感や、楽しさが上げられていた。「ポートフォリオ」については、書くことによる効果を実感しているというコメントがあった。

選択項目以外の学生のコメントには、「初めはいやだったが、だんだんに効果や楽しさを実感できた」という記述が多かった。「もっと内容の濃い話し合いがしたい」という意見や、他にも授業に対する否定的な記述が何人か見られた。

### ■ 「ためになった」と思う回の授業を選んでください（複数回答可・回答人数実数）

- 第1位「第3回 他者と接し交流する」 714人
- 第2位「第2回 新しい環境で他者と出会う」 484人
- 第3位「第8回 マナーについて考える」 463人
- 第4位「第6回 図書館にふれる」 438人
- 第5位「第12回 卒業生から学ぶ」 407人

この結果については、「ためになった」理由を尋ねていないため、はっきりと分析することは出来ないが、第2回・第3回は大学入学間もない時期に授業を通して人間関係を作っていくことが印象的だったのではと考えられる。また第12回の卒業生から学ぶ回も、卒業生パズルを実施しグループワークが活性化したクラスが多かった。マナー、図書館はテーマが具体的であり、学生にとって実施した成果が分かりやすい授業だったのではと考えられる。これらから考えられるのは、グループ学習が活性化する授業運営の重要性とともに、授業テーマについても学生にとって価値が感じられる内容が望ましいという点である。

## 4. 担当教員アンケート

次に担当教員アンケートを通して見ていく。アンケートは第15回目終了後に実施した。記名式とし、自由に意見

を記入できるよう記述形式の設問を多くした。

#### ①学生の変化について

学生の変化に関する特徴的なコメントでは、「メンバー同士が仲良くなることで、学生の発言が増える」「学生自身が、この授業の意味を理解するようになった」「仲間意識やお互いに共有できる意識が生じた」といったものがあった。一方、変化は望ましい方向だけではなく、慣れから、授業への取り組みが悪くなったという変化も見られたようだ。

#### ②教員自身について

担当教員に自分自身についても振り返ってもらった。

#### ■「自立と体験 1」を担当することについて

40 人中「楽しんだ」という教員が 20 人、「大変だった」という教員が 21 人だった。両方の項目につけている教員もいて「楽しいけれど大変だった」ということもあったようだ。

#### ■「グループ学習形式の授業」について

「自立と体験 1」の特徴である「グループ学習形式の授業」について、「進めやすかった」が 16 人、「難しかった」が 13 人だった。全般として、グループ学習形式の経験があったり、グループアプローチが専門の教員にとっては進めやすく、経験のない教員にとっては難しかったという傾向が見られた。

#### ■用意された教案のやり方を変えたり工夫したりして授業を進めた

「はい」と答えたのは 22 人だった。教案はあくまでも基準であって、必ずしもそのとおりに進めなくてはならないものではないが、その点が担当教員にきちんと伝わっていなかった。そこが授業の進めにくさにつながった教員もいたようだ。

#### ■自分の授業への影響

影響があったと答えた教員は 8 人だった。「自立と体験 1」で実施してみた協働学習の手法を、自分の専門の授業に活かすなどの好影響があったという教員は、全体の 20% 程度だった。

#### ■学生との関係の変化

変化があったという教員は 9 人だった。この項目も人数が少ないが、学生との関係が近くなったと感じている教員が多かったようだ。

なお、この項目に○をつけている教員は全て「自立と体験 1」を楽しんだという項目にも○をつけている。授業を担当する楽しさの理由は、学生との関係が変化したからということもあったのではないかと考えられる。

#### ■TA / SA について

TA / SA がついていた 36 人中、「有効に機能した」は 30 人だった。「助けられた」という意見が多く、「作業的負担の軽減」「学生に近い立場」「グループ人数の少ないときなど演習の補助」などの役割を果たしていたようだ。機能しなかったというケースは、「役割が明確でない」「欠席が多い」などの理由だった。

## 5. TA / SA アンケート

TA / SA にも終了後にアンケートをとった。主な意見を挙げておく。

「人見知りなので、授業補助を引き受けつつもはじめはすごく緊張して大変でしたが、だんだん慣れて先生や学生と話すようになり、自然と楽しめるようになりました」

「初めの頃は話しかけてもうなずくくらいだったのが、最後の方は「ありがとう」やいろいろ話してくれるようになったり、アドレスなども聞かれるようになった。先生に言いにくいことなど聞きに来てくれるようになった」

「自分自身、いろいろな学生と触れ合うことが出来て、非常に有意義な時間をすごせた」

「フレッシュな1年生のときの意気込みを思い出した。また人と知り合って、「初めまして」のコミュニケーションの変化を客観的に見られて面白かった」

授業補助につくことで、TA / SA 自身も変化、成長していたことが分かった。

## 6. 平成 22 年度実施からの課題

最後に、今後に向けて、課題を4点整理しておきたい。

### ①授業運営

授業の話し合いの中で学びを深めていくという点については、学生アンケート、教員アンケートともに、「テーマが簡単すぎる」という意見があった。このことが、後半になって学生が慣れてしまい、雰囲気がだらけたクラスがあったことにも関係していたようだ。

これはもちろんテーマだけの問題ではなく、授業の構成や進め方の改善が必要と考えられる。「学生が自分で考えを深めていける内容」「授業の連続性」「授業を通して成長している実感」といった点を配慮した授業運営が必要と考える。

### ②ポートフォリオ

ポートフォリオについての学生評価は、他の項目と比較すると、やや低かった。また担当教員からのコメントでも「記入が非常に少ない学生がいる」「教員からのコメントを記入しにくい」という意見があった。また半年間の学びの深まりという点では不十分な印象もあった。記入しやすい項目の設定、教員のコメント記入のしやすい仕組みが必要と考える。

### ③スチューデントスキルの獲得

「自立と体験1」は、授業のプロセスの中でスチューデントスキルを身につけることも目指している。ここでいうスチューデントスキルとは大学で学ぶための前提となる力や姿勢・態度である。具体的には、主体性、自己管理（時間管理・学習習慣づけ）、人と関わる力と考えられる。22年度の実施状況を振り返ると、「自立と体験1」の授業に取

り組む中で、体験的に身につけることが出来る仕組みが不足していたようである。①授業運営、②ポートフォリオとも連動させながら、学生が主体的にスチューデントスキルを獲得できるよう考えていくことが必要である。

#### ④担当教員のサポート体制

22 年度は授業を実施していく中で、担当教員に対してニュースレターや授業運営補助教材などさまざまな支援を発信していた。教員アンケートでもこれらについては評価を頂いた。一方、授業運営や学生との関係などに関して担当教員が難しさを感じていたことなど、終了後にアンケートを回収してみてもはじめて把握できたことも多かった。結果としてサポートが一方通行になってしまい、担当教員の「わからない」「困った」というシグナルが届かなかった。「お困り解決シート」や明星教育センターの教員によるグループリーダー制は、意図したほどは機能しなかった。さらにセンター側からの積極的な働きかけが必要と考える。

以上、さまざまな観点から、平成 22 年度の「自立と体験 1」を振り返ってみた。初年度の実施としては、ほぼ成功であったということが出来るであろう。平成 23 年度については、さらに改善を加えて学生にとってより良い「自立と体験 1」の授業を作っていきたいと考えている。

以 上